令和４年１月30日　北日本新聞

顎変形症手術 3年で5倍

専門医着任の県立中央病院

保険適用「治せると知って」

顎が変形したりかみ合わせに異常が出たりする「顎変形症」を治す手術が、県立中央病院（川端雅彦院長）で増えている。県内で手術を行う医療機関が少ない中、同病院の歯科口腔外科に専門医の小島拓医長が着任したことが理由で、2021年度は18年度比5倍の35件が行われる見通し。公的医療保険が適用されると知らず、治療しないまま悩んでいる患者が多いといい、小島医長は「顎変形症は治せることを知ってほしい」と話す。

（藤田愛夏）

手術前

手術後

（写真はいずれも県立中央病院提供）

顎変形症は▽下顎の前歯が上顎の前歯より前になる▽上顎の前歯が突き出す▽かんでも上下の歯が閉じない―といった状態になる。日本顎変形症学会によると、全国で年間5千人程度が診断を受けているという。

かむ力や発音に悪影響が出るほか、歯並びの悪さから歯ブラシなどでのケアが難しく、歯周病などにつながるリスクも高くなる。軽度の場合は歯科矯正で治療できるが、変形が大きい場合は手術が必要になる。

手術では、全身麻酔で顎の骨の一部を切ってバランスの良い場所に移動させ、人体への影響が小さいチタンのプレートなどで固定する。口の中から処置するため、顔に傷が残ることはない。術後に顔面や唇などに知覚異常が現れることもあるが、数カ月～1年程度で改善するという。

小島医長は17年に同病院に着任した。専門医の診察を通じ手術を希望する人が徐々に増え、手術件数は18年度の7件から毎年増加。21年度は35件を予定している。

顎変形症と診断されると、かかりつけのクリニックなどでの手術前後の歯科矯正と共に、公的医療保険が適用される。手術自体の自己負担額は、入院費用を含めて30万～60万円程度という。

日本顎変形症学会によると、全国で年間4千人以上が手術を受けているとみられる。

容姿に変化 心も前向き

顎変形症は、顎の骨の発達などに伴って発症する。遺伝的な要素が強いとされるが、発症の詳しいメカニズムは分かっていない。指しゃぶりや舌を出す癖が要因とする説もある。

かむ力などへの悪影響だけでなく、容姿に対してコンプレックスを抱く患者は少なくない。手術はあくまで顎の機能改善が目的だが、術後に「人前で笑えるようになった」「性格が明るくなった」「手で口元を隠さなくなった」など、心理的にも前向きな変化が現れるケースが多いという。

小島医長は「悩んでいる人は、まずはかかりつけ医などに相談してほしい」と話している。